

過疎地小規模校において地道に続けられてきた「全校音楽」に見る音楽教育の原点
-愛知県額田郡額田町立千万町小学校の40年以上に亘る全員合奏の取り組み-*1

愛知教育大学 新山王政和

はじめに

筆者はこれまで、表面的な面白さだけを提供する「劇場型活動」や、「やった、楽器に触れた、楽しかった」だけの「一過性体験型活動」のみを追い求めるのではなく、子ども達が演奏表現にこだわり思考プロセスを通して演奏を創り上げていく「イメージング力」を育む活動や、演奏を媒体として子ども同士が活発に意見を交えながら演奏を創り上げていく「共創」を体感できる活動を提案してきた。それは、元々音楽なるものが地道な継続によって技術や知識を獲得し、思考活動を通して自分なりに演奏表現を工夫したり美的価値を再構築した時に初めて達成感や成就感を感じ得るものである、と考えるからである。現実的な問題としても、教員数が少ない小規模校において劇場型や体験型の活動が無計画に導入すると、「誰かに来て貰って何かやって貰えばよい」ことになってしまい、いずれは音楽科の授業に対して責任を持つ教員も居なくなってしまうかねない。今回リポートする千万町小学校の「全校音楽」では、年数回の専門家による指導を受けながら、児童全員が様々なやり取りや互いに教え合うことを通して演奏表現を創り上げていた。それを学校内活動の「核」の一つと位置づけたことにより、その教育効果は音楽科のみならず学校全体にも及んでいる。さらに「(自分達の) まちの学校」という意識の下、地域住民から学校へ向けられた潜在的な期待や要求とも向き合い、地域の音楽活動のセンター的な役割も担ってきた。ここに、公教育の場における音楽教育の原点を見たように思う。

1. 愛知県額田郡額田町立千万町小学校について

額田町立千万町（ぬかたちょうりつ・ぜまんじょう）小学校は、平成17年秋に全日本音楽教育研究会全国総合大会が開催された岡崎市の北側に隣接する額田町の山間地にある。学区は千万町と木下の二つの集落からなり、学区内では250年余りの歴史をもつ無形文化財の「千万町神楽」が伝承されている。「真心」を校訓とし、「よいことば」（進んで豊かに自己表現できる子ども）、「明るい心」（心の美しさを求め合う子ども）、「力いっぱい」（ねばり強くやりぬく子ども）を教育目標に掲げ、「やりぬく心で生きた証をつくる千万町っ子」を育むための研究を数多く行ってきた実績を持つ。現在の児童数は10名で所謂過疎地の小規模校（へき地校）だが、へき地校の長所を伸ばし短所を補うべくユニークな教育活動へ伝統的に熱心に取り組んできた。その一つが、今回リポートする昭和39年から今日まで途切れることなく続いている児童全員による「全校音楽」である。

小学校の歴史は古く明治7年に桜形学校文教所として創立、明治40年と昭和31年に町村合併により校名変更し、さらに平成18年1月をもって額田町と岡崎市が合併したことに伴い岡崎市立千万町小学校となった。岡崎市は伝統的に教育熱心な地区であり、特に音楽教育の活動では昭和22年に始まった「岡崎市連合音楽会」が昭和48年に「岡崎のハーモニー」へと発展継承され、今日まで続いている。この岡崎市と隣接する額田郡（額田町、

幸田町) も同じように教育熱心な地区で、毎年度開催された全教科による教育研究大会と併行して、研究教科を指定して数年単位で計画的に授業研究に取り組んでいた*2。これら額田郡と岡崎市の音楽活動の成果の一端を、岡崎市で開催された昭和 57 年の全日音研愛知大会及び平成 17 年の全日音研愛知総合大会に於いてともに演奏披露しているのも、耳にされた方も多いと思う。千万町小学校とは、このように元々教育熱心で、特に音楽の教育活動が活発な地区に属している。



2. 児童全員による「全校音楽」の歴史について

昭和 20 年に 84 名だった児童数は、過疎化が進んで現在は 6 世帯（うち 1 世帯は町外からの移住家族）、10 名（2 年 2 名、3 年 2 名、5 年 5 名、6 年 1 名）まで減っている。全校音楽が始まった昭和 39 年には既に児童が 52 名に減少しており、小規模校として授業運営に苦慮する場面が少なくなかった。特にチームプレイを必要とする体育科とアンサンブルが不可欠な音楽科においては、各学年別では活動が成立しないこともあり、それ以前から全校で実施する授業形態が工夫されていた。さらに、小規模校の家族的な雰囲気の中で育った子ども達が中学校へ進学後（町内 8 小学校から 1 中学校へ進学、通学困難者は寮生活）、なかなか自己を表現して自分の意見をはっきり述べることや、他者と意志の疎通をとることが難しいことを心配する声が保護者から数多く出されていた。このような背景もあって、全校をあげた音楽活動で連帯感やリーダーシップ等の社会性の大切さを体感し、目標に向かって本気になって真剣に取り組むことを体験することが、他者理解や自己表現、自己実現の力などを育むのに効果的であると注目を集めることとなった。折しも、昭和 39 年の東京オリンピック開催とそれに合わせた東海道新幹線の開通などのイベントに影響され、各地の小中学校で鼓笛隊や吹奏楽が作られた時期でもあった。次に、全校音楽が創設された昭和 39 年から現在までの 40 年以上に亘る活動について概観してみたい。

①鼓笛編成の時代（昭和 39 年～昭和 42 年）、平均児童数 50 名前後

昭和 39 年に児童全員による全校音楽の活動が鼓笛の編成で始まる。最初の 2 年間は地域や学校内の行事等で演奏していたが、昭和 41 年に中部日本放送が「CBC こども音楽コンクール」を創設したことから、子どもたちに多人数の前で演奏する機会を持たせたいとの思いもありこのコンクールへ参加する。以後 40 年以上に亘って毎回欠かすことなく参加し

ている。

[コンクール演奏曲（以下、コンクール曲と記す）：民謡メドレー、五木の子守歌]



②リード楽器を中心とした器楽合奏の時代（昭和 43 年～昭和 52 年）、平均児童数約 30 名前後

コンクールへ参加して他校の演奏や名古屋などの都市部の学校の取り組みを見聞きしたことで音楽表現に対する関心や質的な要求が高くなったことから、鼓笛編成から当時流行していたリード楽器（鍵盤ハーモニカ、アコーディオン）を中心とした器楽合奏へ衣替えすることとなった。これによって演奏表現の幅が広がり、よりいっそう合奏に対する興味や関心が深まることとなった。

[コンクール曲：君が代行進曲、波涛を越えて、旧友、ファランドール、セビリヤの理髪師、ハンガリア舞曲 5 番、トルコ行進曲、美しく青きドナウ、軍隊行進曲、ペルシアの市場にて]



③全校音楽の在り方を問い直し、追求した時代（昭和 53 年～昭和 58 年）、平均児童数 20 名前後

昭和 52 年から昭和 58 年にかけて、へき地教育研究大会において全校音楽の演奏を披露

する機会が多くあり、研究発表や提案も数多く行われた*3。これらの研究会への参加をきっかけとして、それまで継続してきた全員参加による全校音楽の教育目標と教育効果、指導や活動の在り方を洗いなおし、再評価をすることになる。そして、コンクールは子どもにとって最も分かりやすい活動の目標になること、より質の高い音楽活動に対する強い動機やきっかけになること等の理由により参加を継続するものの、活動目標をコンクール以外にも広げることとなった。それを受けて、子ども自身の手による作詞や作曲も試みられ、その作品を全校音楽で演奏することも行われた。作品の中には、今でも子どもたちによって歌い続けられている曲もある。

〔コンクール曲：アメリカンパトロール、荒城の月変奏曲、ボギー大佐、ハンガリア舞曲第6番、美中の美、カピタン〕

④健康教育の視点から全校音楽の活動を深めた時代（昭和59年～平成7年）、平均児童数20名弱

昭和59年から4年間、健康教育推進校に指定されたため、「子どもとともに創る健康教育」の研究活動の中で健康教育と全校音楽の活動の関わりが追求された。健康教育の研究では愛知県特別優秀校や全日本健康優良特別優秀校の表彰を受け、その研究発表会では全校音楽も披露され全校体育活動と全校音楽活動の両立について参観者から高い評価を受けた。

〔コンクール曲：ラデツキー行進曲、ウィーンはいつもウィーン、ワシントンポスト、アメリカンパトロール、勝利の父、クワイ河マーチ、軍隊行進曲、旧友、トルコ行進曲、クシコスポスト、カピタン、ラデツキー行進曲〕

⑤木琴とマリンバを中心とした器楽合奏の時代（平成8年～現在）平均児童数10～16名

児童数の減少により一人ひとりの子どもへの負担が大きくなったこと、体格の小さい子どもにはアコーディオンは重く蛇腹の操作も体力的に負担が大きいため思うような音楽表現に結びつきにくい等の理由により、木琴を中心とした器楽合奏へ編成を変えることとなる。その後、岡崎市出身のマリンバ奏者である小田もゆる氏から指導を受ける機会があり*4、これをきっかけとしてマリンバも加えた編成が確立し今日へ至っている。また小田氏による指導や交流演奏会も毎年定期的に継続されており、近年は小田氏のご家族の方も加わって指導して頂いているそうである。当校の教職員定数は校長と養護教諭を含めて7名であることから、これまで音楽を専門とする教員が在籍することは極めて稀であった。そのため教師自身も大変苦勞しながら指導することが少なくなかったので、定期的にプロマリンバ奏者の小田氏から専門的な指導を子ども達が直接受けられるようになったことは極めて貴重である。

〔コンクール曲：星条旗よ永遠なれ、軍隊行進曲、トルコ行進曲、ウィーンはいつもウィーン、クシコスポスト、ラデツキー行進曲、双頭の鷲の旗の下に、ボギー大佐、旧友、ウィーンはいつもウィーン〕



以上これまでの活動を概観したが、この間に参加したコンクールでは優良賞、優秀賞、最優秀賞、決勝大会優秀賞、決勝大会奨励賞、決勝大会特別賞、決勝大会最優秀賞（文部大臣奨励賞選考全国大会出場）、愛知県芸術文化選奨文化奨励賞、ヤマハ賞、中日新聞社賞の各賞を受賞している。また、CBC 子ども音楽コンクール創設時から一回も欠かすことなく参加している例は他に無く、当校図書室に掲げられた 40 枚以上の賞状を目にした時、「教育活動における継続とは力であり、それ自体が財産になる」ことを再認識した。余談になるが、このコンクールを主催運営している中部日本放送社内にも全ての資料が残っていないことから、当社から千万町小学校へ取材に来ることもあるという。

3. 「全校音楽」活動に設定された教育目標と、その教育的効果について

資料によると、全校音楽の活動の目標として次のことが設定されている。

- ・目標をもってねばり強く取り組む態度を育てること
- ・みんなで創り上げる楽しさや感性を育てること
- ・異なる年齢の集団による思いやりの心を育てること
- ・積み上げを活かし、より高いレベルに挑戦する元気を育てること

そして、実際に活動の結果として子どもたちにどのような成長が見られたのか、学校側による分析報告の中からポイントを整理してみたい。

- ・全員で音楽を作り上げるというのは一人一人が力を合わさなければできないことであり、その見通しを立てながらがんばっている
- ・自分の持ち場をクリヤしようと努力する態度が身についている
- ・互いに協力し、よりよい音楽を創ろうと努力する態度が身についている
- ・他を思いやり、高い目標へ向かおうとする態度が身についている

さらに全校音楽活動を継続することができた要因として、次のような点を挙げている。

- ・全校音楽としてがんばっていける原動力は「楽しさ」である
- ・親子共通の話題として合奏があり、親子合奏の楽しさを体感している
- ・少人数であっても音楽表現を工夫できる楽しさを体感している
- ・より質の高い演奏へ挑戦するための耳も育っており、よりよい音楽表現を創ることを望

んでくる

以上の分析報告に加えて、活動の場では次のような子ども達の姿も見られた。

- ・自分の持ち味を最大限に発揮しようとしていた
- ・友達と助け合い励まし合おうとしていた
- ・友達同士の連帯感やリーダーシップなどの社会性を身につけようとしていた
- ・本気になって、真剣に活動へ取り組もうとしていた
- ・よりよい音楽表現に向かって力を合わせようとしていた

これらの点が学校関係者だけではなく地域社会においても評価され、全校音楽の活動に対するさらなる理解と協力へと結びついていると言えよう。さらに、この実績は額田町内にとどまらず愛知県内の音楽教育関係者からも高く評価されており、全国のへき地教育研究会関係者の間でも広く知られている。また、小学生の時代に質的に高い音楽体験を子どもへ持たせることができたことを、大変貴重な機会であったと考える保護者も少なくない。ただ筆者が驚いたのは、小学生とは思えないような素晴らしい演奏をしていた子ども達が、そのレベルでマリンバを叩けることを特別なこととして意識していない点である。千万町小学校の演奏を聞いた方々が、「あれだけ叩けるのだから音楽の道へ進まないともったいないですね」と口にしたことがある。筆者も同感であるが、小田氏から専門的な指導を定期的に受けている彼らにとっては、音楽表現を工夫して創り上げることや、それに必要な技術や知識を身につけることは特別なことではなく、そうするのが当たり前なのだと考えているように思われた。良い意味で、良い方向へ熟した音楽教育を見たように感じた。



4. 「全校音楽」の活動の様子

現在は全校音楽として木琴とマリンバを中心とした合奏を行っているが、過疎地であることから練習時間には制約があり、子ども達は通学のために午後3時半には下校しなければならない。そのため放課後に練習することは無理であり、クラブの時間や総合的な学習の時間から週1時間を捻出して練習時間に充てている。しかし、一年中に亘って器楽合奏の練習をしている訳ではなく、当校では他に「全校体育（一輪車、ドッジボール）」や「全校読書」、「千万町っ子エコクラブ（環境学習）」、「ふれあい交流活動」、「国際交流活動（ウ

クライナ・ハリコフ子どもバレエ団など)」、額田町全体で行う「額田集合学習」、「ともえ学習（生活科、総合的な学習）」の活動が活発に行われているため、全校音楽の活動時期は次のように限定されている。

- ・一学期は週一回一時間の練習
- ・夏休み中に半日のコンクール前特別練習を10日間程度（小田氏による指導も含む）
- ・二学期は、学芸会までは運動会や学芸会の練習を週一回一時間。学芸会の前には後述する「児童と保護者・教職員による親子合奏」のための親子練習が適宜行われる
- ・学芸会終了後は、依頼演奏がない限り翌年の4月まで器楽合奏の活動は休止する

しかし、千万町小学校ホームページで公開されている演奏録音を聞いて頂ければ分かるのだが、演奏のレベルは高い*5。このように限られた活動時間にも拘わらず音楽的に質の高い演奏を支えているのは、小田氏による専門的な指導協力と子ども達の自主練習、かつて同じように全校音楽を体験した保護者からの子どもへの励まし、上級生から下級生への子ども同士の教え合い、そしてコンクールへの参加という子どもにとって分かりやすい活動目標と練習に対する評価が全校音楽に対する興味や関心を奮い立たせている、等であろう。このうち、他の児童へ教えるという行為は子どもにとって貴重な体験であり、教えることをきっかけとして自身の練習にもさらに熱心に取り組んでいた。なお誤解のないように付け加えるが、全校音楽の活動を音楽に対する興味関心を誘発する核と位置づけながらも、音楽科の授業では様々な活動を取り上げている。また学区内に伝承されている無形文化財「千万町神楽」についても、保存会の協力を得ながら学習している。さらに、子ども達は学校内生活の一環として日常的に休憩時間を使って様々な音楽を楽しんでおり、筆者が訪れた際もハンドベルを演奏して遊んでいた。

5. 「全校音楽」の活動に対する子ども達の反応

次に、実際に活動している子ども達が全校音楽（器楽合奏）の活動に対してどのような気持ちを抱いているのか、その一端を紹介しておきたい。子ども達からは次のような言葉を耳にした。

「色々な人と交流できて楽しい」、「色々な所へ演奏に行けるから嬉しい」、「皆と一緒にできて楽しい」、「初めは自分のパートができなくて嫌い」、「初めは皆についていけなくて練習が辛い」、「夏休みの集中練習のときに少し疲れる」、「夏休みの集中練習のときは、学校で友達に会えるから嬉しい」

これらの言葉から、音楽的な面からの楽しさだけではなく、子ども自身の生活の一つとして、また良い意味で遊びの延長として器楽合奏の練習を楽しんでいる様子を窺うことができる。

また、児童が記した作文の中から、全校音楽に関する記述を拾ってみたい。

「私が今がんばってることは『ぜんおん』です。コンクールで賞をとりたいのでがんばっています。たまに間違える所があるので、そこに気をつけてやっています」、「今、がんばっていることは全校音楽です。今年の曲はとても難しいですが、がんばっています。言われたことをしっかり守っていい演奏をしたいです」、「今、私ががんばっていることは、全校音楽の練習と読書です。私は音楽コンクールで全校音楽のいい演奏ができるようにが

んばっています。コンクールではいつもどおりのいい演奏ができるといいです」、「千万町小学校の好きなところは、毎年コンクールに出ていることです。私は音楽が好きなのでとても嬉しいです」、「私が、今夢中になっていることは、全校音楽です。コンクールへ出て賞をとり、全国大会へ出てみたいです。私は、千万町小学校で一番好きなところは、全校音楽です。みんなで力を合わせて一生けんめいやるからです」、「千万町小学校の良いところは、なんと言っても全校音楽です。コンクールへ出場しています。みんなの心を一つにして賞をとろうとがんばっています。僕の願いは、千万町小学校がずっと平和で全校音楽を続けていってほしいということです」、「僕が今夢中になっていることは、全校音楽と一輪車と読書です。全校音楽はこれからもこの歴史を続けていってほしいと思います。千万町小学校のよさは、団結力があることです。一輪車でも全校音楽でも、団結力がなければうまく合わすことができません」、「千万町小学校の好きなところは、1年から6年までの全校児童と遊んだり、音楽をしたりできるところです」、「千万町小学校の児童は少ない人数だけど、全校で音楽や体育をやるので、とても楽しい学校です。全校音楽は、私のお父さんが小学生の頃から続いています」

以上のように作文ではコンクールのことを記している子どもが多かったが、指導者側としてはコンクールへ参加して評価を受けることを、より質の高い演奏表現へ向かう子ども達の意欲や関心を誘発するきっかけの一つとして位置づけており、これ以外にも後述する親子合奏を初めとして、他地区の小学校やウクライナ子どもバレエ団との交流演奏、老人ホームなどの地域の施設への慰問演奏などを積極的に行っており、このような交流や出かけていって演奏することを楽しみにしている子どもも多い。



6. 「全校音楽」活動によって生まれた新たな活動

全校音楽が40年以上に亘って続いた結果、保護者の多くもかつて同じように合奏を体験していることになる。そのため家庭内においても器楽合奏の練習のことが話題になることも多く、コンクール前の特別練習の時には多くの保護者が学校を訪れて子ども達を励ましている。またCBC子ども音楽コンクール創設以来、欠かさずコンクールへ参加して数々の優秀な成績をおさめてきたことから、町内外からも千万町小学校の全校音楽への評価は高くなり、特に学区内ではその年の演奏曲名や仕上がりの様子などが大きな関心事になって

いった。そのため保護者を中心として、親子合同による「親子合奏」が生まれたのも自然な成り行きであると言えよう。世帯数も減少して子どもの数も減ってしまった近年では、学校長以下全教職員も加わってこの親子合奏の活動を支えている。この親子合奏の活動を通して、家庭内とは異なる場で子どもと触れあうことによって家庭外での子どもの姿に接することができ、子どもの成長を確認することができたという保護者からは好評であり、また子どもたちも、今、自分が苦労していることと同じ苦労をお父さんやお母さんも体験したこと、そしてそれをみんなで乗り越えた時の達成感がとてもよい思い出になっている話などを耳にし、励まされているようである。実際の親子合奏の練習回数は限られているため、予め楽譜を配っておいて各家庭で自主練習をしてきて頂く形をとっている。ここで活躍するのが子どもたちで、子どもが楽譜を読んだり親のパートと一緒に演奏したりして親を教えている。そして教わる側の親も自然体で子どもに教えてもらっている。親に対して何かを教えるという行為は子どもにとって貴重な体験のようで、これをきっかけとして活動への参加意欲が高まり、自分自身の練習にも熱心に取り組むようになるという。中には「お母さんのパートを吹いて練習テープを作った」という子どももいた。この親子合奏の活動は全校音楽の活動と同じように永く続いているため、保護者側にも「子どもが千万町小学校へお世話になるようになったら、自分も親子合奏で演奏するのだと思っていた」という意識が浸透しており、多大な理解と協力を得ている。そのため毎年秋の学芸会では、学区内のほとんどの方々が子どもたちの演奏だけではなくこの「親子合奏」の演奏も楽しみにしている。つまり長い年月をかけて活動を積み上げてきた結果、地域住民から地域の音楽活動を担うセンター的な役割を学校が果たすように望まれ、そして千万町小学校もその地域の期待にしっかりと応えていると言えよう。



おわりに

最後に、現学校長の言葉を紹介しておきたい。「全校音楽という異学年の児童の取り組みとは、上級生が下級生を指導したり手本を見せたりという子ども同士の人間関係を学ぶ機会であり、同じ曲を一緒に創り上げるという仲間意識を育てる場でもある。この活動が学校教育全体に波及していると考えている」。

事実、互いに教え合ったり様々なやり取りによって演奏を創り上げたりするプロセスを通

して、子ども達は音楽の知識や技術を身に付けるとともに、連帯感やリーダーシップ等の社会性の大切さを体感し、目標に向かって真剣に取り組むことの大切さも共有していた。この「活動の核」を拠り所とした波及効果は音楽科の授業や他の学校教育活動にも広がっている。これらの活動を支えてきたのは「地域が持つ教育力」であり、地域住民が絶えず学校へ目を向け、子ども達の活動に関心を持ち、学校教育活動への理解と協力があつたからであろう。その背景には「まちの学校」という地域住民としての意識を喚起し、学校へ向けられた「次代を担う子どもを育てて欲しい」という潜在的要求ともしっかりと向き合い、それに応えるために音楽の活動として何ができるのか、より質の高い活動を模索し続けてきた努力の結果である。ここに、公教育の場における音楽教育の原点を見たように思う。

北山敦康氏は「日本の公教育における音楽教育は、自己再生産の機能を放棄した」と指摘したが*6、もし本当に小中学校の音楽の授業において次代へ伝承するために必要な音楽の知識や技術を身につけることができなくなっているとしたら、我々がめざしていた音楽教育はいったいどこへ向かおうとしていたのであろうか。私見になるが、音楽の知識や演奏の技術を獲得することの本当の楽しさを知らない学生が増えていると感じている。これは奇しくも、小中学校で日本音楽の特別授業を数多く担当している邦楽関係の知人の嘆きとも一致する。より質の高い本物だけが生き残ると言われる今の日本社会において、音楽教育が質をないがしろにしていることを願いたい。「どんなに良いものに思えても、高いレベルのニーズに応えていないものは、いずれ廃れる」ということを自らへの警鐘として、子どもや保護者からの質の高いニーズを喚起するとともに、地域から何が求められているのかを高いレベルの議論で見極めて、それに応え得るような音楽教育活動を模索していきたい。

注

*1：額田町と岡崎市の合併に伴い、平成 18 年 1 月より岡崎市立千万町小学校と校名変更した。

*2：「平成 16 年度額田郡教育研究大会」の指定教科に音楽科が選ばれたため、額田郡内の小学校・中学校に於いて授業研究会が行われた。筆者はこの授業研究会へ 2 年間に亘り参加する機会を頂き、「子どものイメージング力」と、他者との「共創」をキーワードとした提案を繰り返した。（音楽部長：小林國良，副部長：山口竜也，主任：田境里美，太田円，専門委員：石黒佳子，磯部妙子，今泉美貴子，近藤今日子，判治朱里，平木順子）

*3：昭和 51 年愛知県へき地教育研究会「全校音楽」提案校。昭和 52 年「みんなでひびき合わせ築きあげる全校音楽」入選研究論文。昭和 53 年「ひびき合わせる全校音楽」入選研究論文。昭和 55 年全国へき地教育北海道大会研究発表「複式学級の音楽指導」。昭和 57 年「複式学級の音楽指導を効率的にすすめるためにはどうしたらよいかー創作アンサンブル」入選研究論文。その他

*4：小田もゆる：打楽器奏者。国立音楽大学打楽器科卒業、上野信一&フォニックス・レフレクション所属、東京成徳短期大学非常勤講師。

http://www.phonix.jp/profile/moyuru_01.html

*5：過去数年のコンクール演奏録音を聞くことができる。<http://www.oklab.ed.jp/zemanjyo/>

*6：北山敦康氏はしばしばこの言葉を述べているが、筆者が公の場でその話を耳にしたのは平成 16 年度静岡大学附属島田中学校研究大会の講師助言、及び同 17 年度大会の講演であった。